様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：２８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０１０１

研究課題名（和文）南洋群島における沖縄の人々による音楽芸能の展開と現地住民との交流の実態

研究課題名（英文）The Actual Conditions of Okinawan Musical Performances and Cultural Exchange with Micronesias Prior to the Pacific War

研究代表者
小西　潤子（Konishi, Junko）

沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：７０３３２６９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、文献調査、沖縄県内および現地の関係者への聞き取り調査、録音・録画を含む情報収集によって、沖縄音楽芸能史において看過されてきた戦前南洋群島の沖縄移民社会での音楽芸能と交流の実態を明らかにした。戦前南洋群島の沖縄移民社会では、古典音楽・舞踊と民俗芸能の接合やそれらの要素を融合した作品が成立し、豊かな音楽文化が展開された。また、沖縄県内各地にミクロネシア発祥の行進踊りが伝播し、現在でも余興として演じられている地域もあることがわかった。

研究成果の概要（英文）：　In this study, the actual conditions of Okinawan musical performances in the Okinawan immigrant society and cultural exchange with Micronesians in Nanyo gunto (Micronesia), which were overlooked, are explored. Prior to the Pacific War, the Ryukyuan classical and folk music and dance flourished and new materials were composed by Okinawans in Nanyo gunto. On the other hand, the Micronesian marching dance was brought to many places in Okinawa prefecture. This is still performed in villages as an entertainment.

研究分野：民族音楽学

キーワード：南洋群島　沖縄　音楽　芸能　ミクロネシア　行進踊り

１．研究開始当初の背景

日本による統治支配（1914-1945）により、南洋群島には多くの日本人移民が渡った。1921 年の（株）南洋興発会社設立以降、沖縄県出身者の人口が最大勢力となり、1936 年サイパン支庁管内では全人口 45,227 人のうち日本人 40,836 人 （約 90%）、そのうちの 24,649 人（約 55%）を沖縄県出身者が占めるに至った。

戦後編纂された沖縄県史や市町村史においては、旧南洋群島帰還者による初期開拓時代の労苦、玉砕と帰還後の痛ましい体験、米軍収容所でのつらさが証言されている。一方で、故郷沖縄の音楽体験や沖縄芝居の享受、現地の人々との歌や踊りの交流をする人々の姿もあった。戦前の南洋群島とりわけ北マリアナ諸島は、県外居住地のように沖縄文化が栄えていた。しかしながら、当時の南洋群島における沖縄の音楽芸能に関する調査は十分行われてこなかったこと、大多数を占めた沖縄の音楽芸能が旧南洋群島にほとんど痕跡を残さなかったことに、本研究の着想を得た。

２．研究の目的

南洋群島の沖縄移民社会では、古典音楽・舞踊と民俗芸能の接合やそれらの要素を融合した作品が成立し、豊かな音楽文化が展開された。また、行進踊りの沖縄への伝播の背景には、現地住民との音楽交流があった。しかしながら、南洋群島の移民社会での音楽芸能と交流については、沖縄音楽芸能史において看過されてきたし、沖縄県民の記憶からも消えつつある。

本研究では、文献調査、沖縄県内および旧南洋群島における関係者への聞き取り調査、録音・録画を含む情報収集によって、（１）戦前南洋群島における沖縄の音楽芸能の実態、（２）沖縄および現地住民双方の音楽芸能に対する認識を明らかにする。また、（３）沖縄に伝播した「行進踊り」の実態調査を行うことで、（１）、（２）の結果と比較する。そして、（４）座談会および公開シンポジウムを開催し、地域への還元と次世代への伝承をめざすこととした。

３．研究の方法

本研究においては、沖縄県内文献・資料調査、沖縄県内聞き取り調査、旧南洋群島聞き取り調査、情報整理ととりまとめ、学会参加発表、シンポジウム、成果とりまとめの手順により、次の（１）～（４）の内容について 4 カ年にわたって調査を実施した。

（１）戦前南洋群島における沖縄の音楽芸能の実態

①新聞記事（『琉球新報』『沖縄朝日新聞』）、訪問者の記録等から、南洋群島で上演された沖縄の音楽芸能のジャンル名や演目名、伝習・伝承に関する情報を収集・整理した。

②サイパン会、テニアン会等、南洋群島帰還者団体が発行している文書類、移民を多数輩出した具志川市、宜野座村、金武町等の市町村誌掲載の手記から、関連情報を収集した。

③同時期の沖縄民謡（流行歌）等の演奏分析を行った。

（２）沖縄および現地住民双方の音楽芸能に対する認識

①訪問者の記録や出版物、沖縄県内および旧南洋群島における関係者への聞き取り調査により、沖縄移民と現地住民との接点や両者の音楽芸能への認識を明らかにした。

（３）沖縄に伝播した「行進踊り」の実態調査

①うるま市栄野比地区、宜野座村惣慶地区を中心に、資料収集や聞き取り調査を行った。

（４）座談会およびシンポジウム

①2018 年 1 月 28 日（日）、上運天研成氏（南洋群島帰還者会会長、沖縄サイパン会会長）、田中順一氏（沖縄パラオ友の会代表、南洋群島帰還者会相談役、ペンネーム：南翔順）による座談会「南洋群島帰還者と歌心」（於：沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス）を開催した。

②2018 年 3 月 17 日（土）～18 日（日）に開催されたシンポジウム「沖縄の人の移動と未来への展望―島嶼・環境・文化」（主催：沖縄県立芸術大学附属研究所、於：沖縄県立芸術大学金城キャンパス）の一部として、仲程昌徳氏（元琉球大学教授）による基調講演「南洋文学と人の移動」および飯髙伸五氏（高知県立大学准教授）による報告「南洋のアサドヤユンター戦時体制下パラオにおける鉱山開発と沖縄人の記憶」を開催した。

４．研究成果

（１）戦前南洋群島における沖縄の音楽芸能の実態

三線が沖縄全体に普及し流行していったのは、南洋移民が始まったのと同時期の 20 世紀初めである。士族中心の古典音楽、庶民に親しまれた「もーあしび」、遊女の三線音楽は、沖縄社会において全く別のものと見なされつつも、三線という共通の楽器をめぐって共有される部分があった。この状況は、1915 年に始まる「琉歌レコード」の誕生とともに変化した。これらの情報をもとに、1920 年代、1930 年代、1940 年代と 10 年おきに区切って、南洋に渡った沖縄の伝統芸能の変化の様相をとらえた。

（２）沖縄および現地住民双方の音楽芸能に対する認識

沖縄県出身者を含む日本人は、サイパン等の北マリアナ諸島においては、南洋群島の人々がチャモロとカナカ（以下、カロリニアン）に二分されていることを知った。いずれ

も、沖縄県出身者との接点は居住場所等の条件によってさまざまであった。

沖縄県出身者からみて、西洋化の進んだチャモロと肉体労働に従事するカロリニアンの音楽芸能とのギャップが大きかった。すなわち、チャモロは洋風の住宅でピアノを習い、キリスト教を信奉するのに対して、カロリニアンは月光と炊火の明かりに照らされた男性が隊列を組んで、勇壮にボディパーカッションを行っていた。当時の記録には、沖縄と同様、公的な場では芸能は男性のみが担うことに注目するものもあった。

一方、現地の人々の多くは、沖縄の音楽にほとんど接していないことがわかった。料亭から漏れ聞こえる三線の音や沖縄芝居については知られていたが、言葉の違いから関心がもたれなかった。沖縄県出身者は、外向きの接待のための騒々しい音楽と、一音一音を大切にして同じ場にいる人々を一体化させる音楽を区別していたが、現地の人々の理解を得るには至らなかったことが明らかになった。

（３）沖縄に伝播した「行進踊り」の実態調査

現地の人々と沖縄の人々との間で唯一共有されたのが、南洋群島各地に広く分布する行進踊りであった。一部の地域では、80 年以上経った現在でも、当時伝わった行進踊りが観月祭（十五夜）や結婚式の余興として親しまれてきた。

うるま市栄野比地区（以下、栄野比）の島民ダンスは、1940 年に 0 氏が倣って持ち帰った。ハーモニカ演奏による≪酋長の娘≫での入場・退場行進、軍事教練の型、≪ウワドロ≫、≪アバイの月≫、≪リーエン　ナイシー≫から構成され、各演目の間には語りや自己紹介が挿入されている。西洋の軍事教練に由来する「レーフ、ライ」の号令と一同の「ファスタイロン」、その場足ふみ（＝行進）を基本とし、「ファイルストップ」「ファンダストロン」「デグロップ」の型があることを論じた。なお、≪ウワトロフィ≫の踊りの分布は、非常に広いことがわかった。

宜野座村惣慶地区（以下、惣慶）の南洋踊りは、N 氏（1924 年生まれ）がもたらした。1963 年の村芝居で青年会が踊り始め、仲原銀助氏がカンカラ三味線を導入した。その後、毎年十五夜の頃に村芝居の幕間芸のほか、結婚祝いや中学の学芸会でも上演された。演目は≪カナカの娘≫での入場・退場行進、自己紹介、≪シーサングーリー≫、≪ウワトルヒー≫から構成され、リーダーによる「マブイメッカイチューリ！」「インターナショナルダンス！」「ハウス in ゴー」の号令があることがわかった。なお、惣慶にのみ存在する≪シーサングーリー≫は、伝承の過程で新たに付け加えられたものであることも明らかになった。

行進踊りは、いずれかの文化に属するものではなく多文化的な要素からなっている。旧南洋群島において、行進踊りは苦しい時期にも人々をなごませ、沖縄人移民、日本本土からの移民、現地の人々という枠を超えて共有された。太平洋戦争終了後には、多くの沖縄県民が収容されたサイパンのキャンプススッペ収容所でも、慰問のために踊られた。沖縄では、戦中戦後を通して地域社会の崩壊と人々の離散が起こった。南洋での悲惨な体験を経た帰還者たちが余興を楽しむ余裕ができるまで、行進踊りは人々の記憶の中に封印されていた。惣慶では 1963 年、栄野比では 1972 年に十五夜の村芝居が再開され、遠い南洋群島で人々の心を和ませた行進踊りが復元され、地域の復興の糧となった。現在でも、南洋帰りの沖縄の人々には、語られない歴史や記憶がある。行進踊りは、その単純さゆえ、多様な文化や歴史、人々の思いを伝える芸能として受け継がれてきたことがわかった。

（４）座談会およびシンポジウム

【座談会「南洋群島帰還者と歌心」】

戦前日本が統治支配した南洋群島、現在のミクロネシア地域の島で幼少期を過ごされ、戦後沖縄に戻ってきた「帰還者」の方々の集まりを取りまとめてきた上運天研成氏（南洋群島帰還者会会長、沖縄サイパン会会長）、田中順一氏（沖縄パラオ友の会代表、南洋群島帰還者会相談役、ペンネーム：南翔順）を招聘し、旧南洋群島で沖縄の人々が営んだ音楽芸能活動についての話を伺った。

上運天氏は、慰霊の日に合わせて開催される南洋帰還者会の余興で、ハーモニカ演奏を披露したこともある。座談会では、カロリニアンの踊り歌≪ウワトロフィ≫の演奏を披露し、ハーモニカがサイパンのマタンシャ尋常高等小学校時代の楽しい思い出につながること等について述べた。

田中氏は、南翔順のペンネームで南洋帰還者の歌づくりを行い、CD『金城実　南洋をうたう』（2005 年、キャンパス）を製作した。それらは、南洋で命を失った沖縄の人々の墓参に際しての「献歌」であったこと、これらの歌が死者と生きる者をつなぎ、生きる力を与える役割を果たしてきたことについて述べた。そのうえで、南翔順（田中順一氏）作詞・金城実作曲の≪アンガウル島巡り≫を沖縄県立芸術大学琉球芸能専攻の学生 2 名が上演した。

参加した学生からは、当事者の体験談を通して、南洋と沖縄の人々を結ぶ音楽を知る貴重な機会となった、平和のありがたさを再認識した等の感想を得た。

【シンポジウム「沖縄の人の移動と未来への展望―島嶼・環境・文化」】

仲程昌徳氏（元琉球大学教授）による基調講演「南洋文学と人の移動」では、沖縄からの南洋移民の歴史的背景と文化についてとりあげられた。すなわち、南洋における異文

化間接触によって、沖縄の≪浜千鳥≫を改変した≪南洋浜千鳥≫が沖縄人によって創作されたこと、逆に現地に伝わる舞踊が沖縄に持ち帰られた例として、栄野比の行進踊りについて取りあげた。そして、いかなるかたちであれ、人が移動することによって、そこに新しい文化が生まれると語って結んだ。

研究代表者との対談では、文字に残らない人々の心と心の交流の歴史が芸能等、様々な形で継承されていること、それらの遺産を次世代に伝えることの重要性が論じられた。

飯髙伸五氏（高知県立大学准教授）による報告「南洋のアサドヤユンタ―戦時体制下パラオにおける鉱山開発と沖縄人の記憶」では、パラオ共和国バベルダオブ島ガラスマオ村落に残されている日本語とパラオ語混じりの歌が紹介された。それは、アサドヤユンタのメロディーを借りて、鉱山労働の場面を歌ったものである。1940 年頃から、軍事用の軽金属となるボーキサイトの採掘が行われた。この歌は、沖縄人と現地人との緊密な接触を物語るが、一方で沖縄人が外地で前線に配置され、戦時下で甚大な被害を被ったことと表裏一体であることを論じた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①2014a　小西潤子　「*Inaka mura*（田舎村）の音風景―パラオ現代歌謡に見る音と心」『日本サウンドスケープ協会 2014 年度春季研究発表会論文集』，15-19（査読無）．

②2014b　小西潤子　「戦前沖縄からの旧南洋群島移民の音楽芸能行動と三線」沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』16，27-42（査読無）．

③2015a　小西潤子　「もうひとつの沖縄音楽の足跡―南洋における音楽交流―」『21 世紀海域学の創成―「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ―』　立教大学アジア地域研究所，71-79（査読無）．

④2015b　小西潤子　「消えたサウンドスケープ―戦前サイパン・ガラパン街で聴かれた音と沖縄県出身者の軌跡―」　沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』17，1-17（査読無）．

⑤2016a　小西潤子　「松岡静雄が公刊したミクロネシア民謡と手稿『南嶌』の比較分析―沖縄県出身の南洋移民 が耳にした歌の記録をめぐって―」　沖縄県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』18，31-50（査読無）．

⑥2016b Philip Hayward and Junko Konishi “A Fleeting Aquapelago: A Theoretical Consideration of The Japanese Presence in The Torres Strait 1880ｓ-1940s”，*South Pacific Studies* 37-2，71-86（査読有）．

⑦2017　小西潤子　「≪てぃんさぐぬ花≫のアレンジと沖縄らしさに関する調査 ―音楽科における「郷土の音楽」指導のために―」沖縄県立芸術大学『教職課程年報』3，195-207（査読無）．

〔学会発表〕（計１７件）

①2014a　小西潤子　「Inaka mura（田舎村）の音風景―パラオ現代歌謡に見る音と心」日本サウンドスケープ協会 2014 年度春季研究発表会，2014 年 06 月 01 日，東京大学農学部

②2014b　小西潤子　「もうひとつの沖縄音楽の足跡―南洋における音楽交流―」　立教大学アジア研究所 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「21 世紀の海域学の創成」プロジェクト公開シンポジウム「南洋と沖縄」，2014 年 06 月 21 日，立教大学池袋キャンパス．

③2014c　小西潤子　「パラオの現代歌謡とその広がり―≪キリギリス≫が≪バドワイザー≫になった？！」　日本音楽学会西日本支部第 20 回例会，2014 年 6 月 28 日，同志社女子大学今出川キャンパス．

④2014d　小西潤子　「パラオ現代歌謡に描かれた自然と心の風景」　2014 年次日本島嶼学会五島大会，2014 年 9 月 6 日，五島市総合福祉健康センター．

⑤2014e Junko Konishi “Musical Communication between Okinawans and Micronesians in Nanyo under the Japanese Administration (1914-1945)”. EWC/EWCA International Conference 2014, Okinawa Japan. 2014 年 9 月 17 日，Pacific Hotel.

⑥2014f Junko Konishi “How Palauans adopt the Japanese music since the 1920s ?: Analysis of lyrics and melody of a song genre called *derrebechesiil*”. Pacific History Association 21st Biennial Conference 2014，2014 年 12 月 3 日，国立台湾大学．

⑦2014g　小西潤子　「南洋と日本語歌謡」東洋音楽学会沖縄支部第 63 回定例研究会，2015 年 1 月 9 日，沖縄県立芸術大学．

⑧2014h　小西潤子　「パラオの歌心―ウタホンとレコーディングをめぐって」　第 32 回日本オセアニア学会研究大会，2015 年 03 月 28 日，プラザホテル山麓荘．

⑨2015a　小西潤子　「Utahong プロジェクトとパラオ国民の反応について」　公開研究会「旧南洋庁地域パラオの日本語からアジア・太平洋の日 本語教育を考える」第 2 回パラオの日本語の記録と分析，2015 年 06 月 06 日，首都大学東京．

⑩2015b　小西潤子　「記憶の中のサウンドスケープ―戦前南洋で響いた三線の音と沖縄人のアイデンティティ―」　日本音楽学会第 66 回全国大会 パネル１:音楽と文化資源としての音環境，2015 年 11 月 14 日，青山学院大学．

⑪2015c　小西潤子　「音楽と文化資源としての音環境―戦前南洋で響いた三線の音と

沖縄人のアイデンティティ」　日本サウンドスケープ協会 2015 年度秋季研究発表会，2015 年 12 月 12 日，関西大学千里山キャンパス．
⑫2016a　小西潤子　「太平洋芸術祭における舞台芸能の調査研究」　沖縄県立芸術大学教育研究資金報告会 2016，2017 年 3 月 22 日，沖縄県立芸術大学．
⑬2016b Junko Konishi “The Micronesian Marching Dance Transmitted to Okinawa: Recollecting and Reconstructing Memories and History in Northern Mariana Islands”, Pacific History Association, 2016 年 5 月 20 日, Guam University.
⑭2016c Junko Konishi “The Lost Landscape and Soundscape of Saipan”, 国際小島嶼会議 ISIC12, 2016 年 06 月 17 日，沖縄県立芸術大学附属研究所．
⑮2017a 小西潤子　「沖縄からの南洋移民と芸能：揺れ動くアイデンティティの象徴」日本島嶼学会
⑯2017b Junko Konishi “What is the Ryukyu scale?: Acceptable Pitch for Okinawan Folk Music by Okinawan Youth”, The 6th Conference of the Asia-Pacific Society for the Cognitive Sciences of Music, 2017 年 8 月 26 日, Kyoto Women’s University.
⑰2017c Junko Konishi “Champuru as a cultural strategy of sustainability: Focusing on the Okinawan Performing Arts in Nanyo”, 2017 Conference of the Council For Asian Musicology, 2017 年 11 月 23 日, Ho Chi Minh City Center for Arts and Literture (Viet Nam).

〔図書〕（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.okigei.ac.jp/outline/teachers/music/musicology_konishi.html

６．研究組織
(1)研究代表者
小西　潤子（Junko Konishi）
沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号：70332690